

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月3日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H01878

研究課題名(和文) 東アジア古典学の次世代拠点形成 国際連携による研究と教育の加速

研究課題名(英文) The Creation of a Next-Generation Hub for East Asian Classical Studies :
Accelerating Research and Education through International Collaboration

研究代表者

齋藤 希史 (SAITO, Mareshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：80235077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは、東アジアに展開された古典世界について、漢字文の書記という観点から構成原理を解明し多様な現象を記述する「東アジア古典学」を国際協働によって推進し、また、次世代への継承のための研究拠点形成として、研究方法のセミナーやワークショップを継続的に開催し、関連文献やデータの整備を行なった。とりわけ、最新の成果を研究方法の実践へと結びつけるセミナーや次世代研究者の発表と討議を中心としたワークショップ等の総計38回にわたる開催、それにもとづいた多くの論文・著書の発刊、日本の漢字文を学ぶための英語教材のドラフト作成および実験授業の開催は、今後の展望を開く重要な成果と言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、東アジアという圏域が漢字という文字およびそれによって書き記された書籍の流通圏として成り立った古典世界を基盤として成立したことをふまえて、たんなる影響や伝播ではない文化現象のダイナミズムが古典によって生まれたことを、6世紀から20世紀にいたるまでを視野に入れて、明らかにしたところにある。

また、その研究を広く共有するための方法的可視化を進め、大学院生も交えた国内外のセミナー、それにもとづいた論文や著書の公刊、さらに英語圏の大学院教育で用いる漢文テキストブックの共同編纂とそれをういた実験授業等によって、国際レベルでの次世代研究者の育成にも大きく寄与した。

研究成果の概要(英文)：This research project promotes a concept of “East Asian Classical Studies” that elucidates an organizing principle from the viewpoint of texts written in kanji about the classical world that developed across East Asia and describes its various phenomena through international collaboration. Moreover, as the formation of a center of research to be inherited by the next generation, this project continuously held seminars and workshops on research methods and prepared related documents and data. In particular, 1) a total of thirty-eight sessions such as seminars that linked the latest achievements to the implementation of research methods, workshops that focused on the discussion of presentations by next-generation researchers, and the publication of many articles and books based on these events, and 2) creating a draft of English-language materials for teaching kanbun and holding experimental classes, can be said to be important achievements that will open up future prospects.

研究分野：中国古典詩文・東アジア古典学

キーワード：東アジア 古典学 日本漢文 中国古典

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 19-22 年度基盤研究(A)「東アジア古典学としての上代文学の構築」(代表：神野志隆光)、平成 24-26 年度基盤研究(A)「東アジア古典学の実践的深化 国際連携による研究と教育」(代表：齋藤希史)の 2 つのプロジェクト(メンバーにはプロジェクトごとに出入がある)の経験を踏まえて構想され、平成 27 年にスタートした。

「東アジア古典学」を掲げるこれら一連の共同研究が生まれた背景には、人文学分野全般において、民族や国民を単位とする文化観念によってさまざまな事象を捉えるという近代のパラダイムが批判されてすでに久しいにもかかわらず、東アジアの古典研究においては、批判は共有されながらも、それとは異なるアプローチがなお構築途上にあるという状況があった。前近代の東アジアでは、近代国家の枠組みを遡らせた地域の枠組みにおいて個別に読み書きの実践が行われ、継承されたのではない。中国大陸で先進的に形成されていた古典世界を起点としつつ、インドシナ半島・内陸アジア・朝鮮半島・日本列島にいたる広い地域において流通した文字(漢字)、流通した文章語(漢語漢文)によるゆるやかな圏域が形成され、その中でリテラシーの基盤が共有され、それぞれに現地化と拡張が行われていた。

当然のことながら、各地域で独自の読み書きの世界は形成されたが、それと同時に、リテラシーを共有することで作られる大きな圏域が構成されたことは、文字と人類との関係を考察する上で、見落としてはならない。そして、この圏域において現れたさまざまな事象は、各国固有の文化という観念を前提とした影響や受容といった枠組みではその実相の複雑さをとらえることはできない。近代パラダイム批判を踏まえた上で、どのような方法がありうるのか、それによって学術的な視野はどのように開かれ、漢字による古典を中核とする東アジアの読み書きの世界の構造と歴史をどのように記述しなおせるのか、そして現代に至ってますます文字との関わり合いを不可避的に深めつつある人類の文明において、得られた知見を普遍的なものとしていかに共有しうるのか。それらが本研究へと継承された大きな課題であり、「東アジア古典学」という枠組みは、その課題に応えるために構想された。

2. 研究の目的

本研究の掲げる「東アジア古典学」とは、東アジアに展開された古典世界を、おもに漢字文による書記という観点から、その構成原理を解明し、多様な現象を記述することを目的とする。本研究は、日本・北米・アジア地域の中堅・若手の研究者を中心とした「東アジア古典学」の研究拠点を形成し、各地域の大学院教育へのフィードバックを積極的に行うことで、次世代の「東アジア古典学」を構築しようとするものである。具体的には、漢字漢文の流通した東アジア全体を視野に入れた書記史・文学史の先端的な共同研究と次世代研究者養成のための高度な漢文読解能力養成を目的とした大学院教育とを相互に関連させた国際連携による研究・教育を、集中セミナーや教科書編纂などによって具体化し、実践する。

3. 研究の方法

第一に、「東アジア古典学」という視点・方法にもとづく新たな書記表現史の構築を目標に、共同研究の軸となる研究集会・セミナーを計画的・発展的に継続すること、第二に、実践的な教育・実習プログラムの完成を目ざし、国内外において実験授業・ワークショップを実施し、あわせて共同討議をすすめること、第三に、教育プログラムに応じた教材の刊行を目ざし、その作成の討議と具体的な制作作業をすすめること、全体にかかわることとして第四に、国内のみならず国際的な討議と発信が可能な環境を維持しさらに発展させていくことを方法とした。

4. 研究成果

以下の 5 項目を軸に活動し、いずれも所期の目標を達成することができた。

- 1) 国際セミナーの継続開催による「東アジア古典学」の拠点形成。
- 2) 次世代研究者の発表と討議を中心としたワークショップの開催による次世代育成。
- 3) 「東アジア古典学」具体化の一環として、教育プログラムに対応した教材作成と刊行を促進。
- 4) 3) で編集された教材・著作のドラフト等を試行・活用した実践的なセミナーの開催。
- 5) 研究会の記録の公開。

具体的には、1) として、「東アジア古典学の方法」「著者と語る」「書誌学実習」の 3 つのセミナーを行った。「東アジア古典学の方法」は共同研究の軸となるセミナーであり、2015 年度から最終年度の 2018 年度までの 4 年間に、通算 9 回開催した。国内では東京大学および京都大学、国外ではコロンビア大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、浙江工商大学で開催の機会を得て、主に北米と東アジア地域を活動拠点とする研究者と、「東アジア古典学」という問題意識を共有するにいたった。

研究会のテーマは「"Man' yōshū and the Imperial Imagination in Early Japan" を読む 『万葉集』の内なる語り」と われ、」(2015 年 8 月 20 日、Torquill Duthie [UCLA])、「日本を

読む 東アジア古典学の中で」(2016年3月7日、蔡毅[南山大学]、銭鳴[同志社大学])、「漱石における小説と漢詩文 二〇世紀の表現/批評行為として」(2016年9月22日、齋藤希史[東京大学])、「Japanese Literature Workshop」(2016年9月23日、齋藤希史、田村隆[東京大学])、「中世東アジアとテキスト 高麗をめぐる」(2017年2月17日、趙惠蘭[梨花女子大学]、手島崇裕[慶熙大学]、浙江工商大学特別講義(2018年3月12日)にて「王昭君説話の語り方」(田村隆)・「日本神話と東アジア漢字世界」(金沢英之[北海道大学])・「王勃と初唐文学 王勃佚文作品の意義について」(道坂昭廣[京都大学])・「漢籍の声」(齋藤希史)、「古典学における専門分野や言語環境を超える研究の可能性—上代日本文学研究の現状と未来から」(2018年5月25日、David Lurie[Columbia University]、Torquil Duthie)、「東アジア古典学のフロンティア 書記表現から見えてくるもの」(2019年3月15-16日、David Lurie、矢田勉[東京大学]、佐々木孝浩[慶應義塾大学]、齋藤希史、田村隆、徳盛誠[東京大学]、金沢英之、道坂昭廣)など、多岐にわたる。参加者は、日本・アメリカ・中国等で東アジア古典学を学ぶ研究者や大学院生を中心とするが、具体的な資料読解の方法と習得から、理論構築を目指した問題意識の共有まで、多様な形態で研究会が開催され、参加者からも高い評価を得た。とりわけ、コロンビア大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校においては、それぞれの大学院教育プログラムに大きく貢献するものとして、継続開催の希望が出される等、その重要性が確かめられた。2019年度に本科研の後継プログラムとしてスタートした科研プログラム「国際協働による東アジア古典学の次世代展開 文字世界のフロンティアを視点として」(代表:齋藤希史)は、この共同研究会「東アジア古典学の方法」の開催を継続しており、さらなる研究交流の促進を図っている。

「著者と語る」は2017年に開始した企画であり、2018年までの2年間で3回開催することができた。「東アジア古典学」の分野で活躍する第一線の研究者を招いて、その著作を軸に若手研究者との間で対話を行うものである。2017年には矢田勉『国語文字・表記史の研究』(2012年、汲古書院)、佐々木孝浩『日本古典書誌学論』(笠間書院、2016年)を扱い、2018年には加須屋誠『生老病死の図像学 仏教説話画を読む』(筑摩選書、2012年)を扱った。各回、若手研究者をディスカッサントとして問題意識を共有しながら、東アジア古典学の新たな研究や方法について議論が行われた他、著者に直接質疑できる貴重な機会であることから参加者からも活発な質疑が行われた。

「書誌学実習」は2017年に開始した企画であり、2018年までの2年間で2回開催した。書誌学実習は、「東アジア古典学」の基盤となる書誌学(書物学)の手法と視点を共有するセミナーとして、おもに大学院生を対象とした実習を慶應義塾大学付属研究所斯道文庫の佐々木孝浩教授に協力を仰いで実現した。書誌学の体系的な説明を受けながら、斯道文庫に所蔵された実際の古典籍によって理解を深めるもので、後継の科研プログラムでも継続的に開催を企画している。

2)としては、「次世代ロンド」という名称でワークショップを2016年より開始し、東京大学、京都大学及び北海道大学を会場として3年間で21回開催することができた。大学院生やポストドク、助教、講師などの若手研究者から発表者及びコメンテーターを募り、自らの所属機関以外の場所での発表を奨励するのが特徴であり、所属機関の枠を超えた研究交流が推進された。

3)及び4)として、英語圏の漢文学習者向けのテキスト作成のプロジェクトを推進した。David Lurie、Torquil Duthie、小野桂子[Princeton University]、Christina Laffin[University of British Columbia]の各氏に執筆協力を依頼し、テキストの構成や取り扱う文献、執筆担当箇所などの打合せを行ってきた。また、2017年12月1日には"A Japanese Vernacular Kanbun Reader" (試行版)を用いた実験授業が行われた。実験授業にあたっては、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、プリンストン大学、コロンビア大学、プリティッシュコロンビア大学から6名の学生が参加した。学生の関心は日本前近代の文学、宗教、歴史など多岐にわたるが、いずれも各々の研究において、日本で読み書きされた漢文を学ぶことの必要性を実感しているとの評価を得られた。なお、この漢文教科書作成のプロジェクトについても、後継プログラム「国際協働による東アジア古典学の次世代展開 文字世界のフロンティアを視点として」に引き継がれ、完成に向けて検討が重ねられている。

5)として、2017年度より全てのセミナーで参加者に当日レポートの執筆を依頼し、中英韓の三カ国語に翻訳してHPで公開した。当日レポートの執筆・公開によって、セミナーの様子や成果、また受講者の感想や収穫を共有することが可能となっている。これらの研究会・講演・ワークショップ・会議の記録は随時ホームページ上に掲載され、参加者が共有するグループウェアにおいて資料も共有された。

なお、本科研における討議や発表にもとづいて生み出された著書・論文も多い。以下の「5. 主な発表論文等」に記載した著書・論文等はその主要なものにすぎないが、「東アジア古典学」の射程の広がりを示している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 33 件)

道坂昭廣、日本に伝わる『王勃集』残巻について—その書写の形式と「華」字欠筆が意味すること—、東方学、査読有、巻130、2015、pp.1-17

金沢英之、吉田兼俱による『日本書紀』研究の基礎的考察(一) 北海道大学文学研究科紀要、
 査読有、巻 348、2016、pp.51-89
 齋藤希史、近世日本の漢詩文:秩序・流通・手法、日本語学、査読無、巻 35-10、2016、pp.56-65
 金沢英之、生成される外部―『古事記』のテキスト性をめぐって、国語と国文学、査読無、
 巻 93-11、2016、pp.18-31
 金沢英之、中世における文字とことば 吉田兼俱『日本書紀神代巻抄』をめぐって、萬葉集研
 究、査読無、巻 36、2016、pp.277-308
 田村隆、貫之が諫め、比較文学研究、査読有、巻 101、2016、pp.4-12
 齋藤希史、漢 の声 : 吟詠される佳句、中古文学、査読無、巻 100、2017、pp.81-93
 道坂昭廣、詩論駢文在日本的傳播序論、駢文研究、査読有、巻 1、2017、pp.135-146
 田村隆、在原業平「月やあらぬ」歌再考、超域文化科学紀要、査読無、巻 22、2017、pp.99-108
 齋藤希史、漱石詩の読者たち、日本近代文学、査読有、巻 98、2018、pp.1-14
 道坂昭廣、「羅振玉より徳富蘇峰への手紙 同志社大学図書館蔵『羅振玉書簡:徳富猪一 郎宛』
 略注(下)」、京都大学大学院人間・環境学研究所歴史文化論講座、査読有、巻 16、2019、1-9
 金沢英之、The World Was Born from the Sea: Reading the Origin of Heaven and Earth in
 the Ruiju jingi hongen, The Sea and the Sacred in Japan、査読無、巻 1、pp.155-165
 徳盛誠、一条兼良における『日本書紀』「神代」解釈の態度 「神」解釈をめぐって、超域
 文化科学紀要、査読無、巻 23、2018、pp.1-24
 田村隆、禁止と愛読の時代 昭和初期の『源氏物語』受難、日本教育史往来、査読無、巻
 233、2018、pp.1-3
 馬場小百合、貴くありけり 『古事記』豊玉毘売の「恋心」と歌の贈答、帝京日本文化論
 集、査読有、巻 25、2019、印刷中

〔学会発表〕(計 42 件)

齋藤希史、唐土を想像する 桜花以前の墨水から、国際シンポジウム『前近代日本におけ
 る《世界》の創造』、2016年3月17-19日、UCLA(アメリカ合衆国・ロサンゼルス)
 田村隆、紫式部はどのように 日常 を綴ったか、国際シンポジウム「日常 とは何か 西
 欧の場合、日本の場合」、2015年5月6日、青山学院大学(東京都・渋谷区)
 徳盛誠、日本書紀解釈における前近代性 クニトコタチをめぐって、東アジア・ワーク
 ショップ「徳川日本における東アジアの学術受容:近世以降の学問方法とその特徴から考える
 (招待講演)」、2015年8月11日、北海道大学(北海道・札幌市)
 齋藤希史、漱石における小説と漢詩文 二〇世紀の表現/批評行為として、東アジア古典学
 の方法 第21回(国際学会)、2016年9月22日、ニューヨーク・コロンビア大学(アメリカ合衆
 国)
 道坂昭廣、試論駢文在日本的傳播、中国古代散文学会第十一届年会暨国際学術研討会(国際学
 会)、2016年9月3-4日、桂林・広西師範大学(中国)
 金沢英之、吉田兼俱の『日本書紀』神代巻解釈の形成--一条兼良『日本書紀纂疏』との関わり
 をめぐって、古事記学会全国大会、2016年6月19日、盛岡大学(岩手県滝沢市)
 徳盛誠、Two Historical Narratives for Japan within Ancient East Asia as the Chinese
 Scriptworld、第21回国際比較文学大会(国際学会)、2016年7月23日、ウィーン・ウィー
 ン大学(オーストリア)
 金沢英之、『日本書紀纂疏』の 理、国際シンポジウム『前近代日本における《世界》の創
 造』、2016年3月17-19日、UCLA(アメリカ合衆国・ロサンゼルス)
 齋藤希史、「日本漢文」?、東アジア古典学の方法 第22回 Japanese Literature Workshop(国
 際学会)、2016年9月23日、ニューヨーク・コロンビア大学(アメリカ合衆国)
 道坂昭廣、羅振玉と日本所在中国典籍(同志社大学図書館・徳富文書『羅振玉書簡:徳富猪一
 郎宛』)の紹介を兼ねて、“浙江與東亞”国際学術研討論會(国際学会)、2017
 徳盛誠、海保青陵「談」の構成 2015海保青陵ワークショップをめぐって、国際研究集会「海
 保青陵の時代としての江戸後期 海保青陵没後200年記念研究会」、2017
 道坂昭廣、「關於正倉院蔵『王勃詩序』抄写文字 以中国諸版本差異為中心」、全球化時代
 的中国文学文献研究 第四届漢文写本研究学術論壇、2018
 道坂昭廣、「關於《王勃集》的編纂時期 以日本保存的《王勃集》卷三十王承烈佚文為根拠」、
 中国詩学研究新視野国際学術研討会、2018
 徳盛誠、「テキストの運動」としての書紀注釈 清原宣賢の試みをめぐって、「東アジア古
 典学の方法」セミナー(国際学会)、2018
 田村隆、王昭君説話の語り方、東アジア古典学の方法 第40回 浙江工商大学特別講義(招待
 講演)、2018
 齋藤希史、漢文脈の近代、人文韓国 HK+第3回海外学者講演会(韓国延世大学近代韓国学研
 究所)(招待講演)(国際学会)、2018

〔図書〕(計 19 件)

齋藤希史、平凡社、『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』、2016、286

徳盛誠、金沢英之 他、ソミヨン出版(韓国)、『東アジア古典学と漢字世界』、2016、421
道坂昭廣、研文出版社、『王勃集』と王勃文学研究、2016、388
田村隆、東京大学出版会、省筆論、2017、300
齋藤希史(「漱石と漢詩文 修辞と批評」執筆)、翰林書房、漢文脈の漱石、2018、208
齋藤希史(魯惠卿訳)、ソミヨン出版、漢文脈の近代:清末=明治の文学圈(韓国語版)(延世大近代東アジア翻訳叢書シリーズ9)、2018、428
齋藤希史(許智香訳)、グルハンアリ、漢字圏の成立(韓国語版)、2018、280

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://eacs.c.u-tokyo.ac.jp/ja/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：徳盛 誠

ローマ字氏名：TOKUMORI, Makoto

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科

職名：講師

研究者番号(8桁)：00272469

(2)研究分担者

研究分担者氏名：田村 隆

ローマ字氏名：TAMURA, Takashi

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70432896

(3)研究分担者

研究分担者氏名：道坂昭廣

ローマ字氏名：MICHISAKA, Akihiro

所属研究機関名：京都大学

部局名：人間・環境学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：20209795

(4)研究分担者

研究分担者氏名：金沢英之

ローマ字氏名：KANAZAWA, Hideyuki

所属研究機関名：北海道大学

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00302828

(5)研究分担者

研究分担者氏名：馬場小百合

ローマ字氏名：BABA, Sayuri

所属研究機関名：帝京大学

部局名：文学部

職名：助教

研究者番号（8桁）：30823174

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。